第六回眼蔵会講義の様子

眼蔵会案内

本年は第七回眼蔵会を5月17日(木)～19日(土)に行います。
駒澤大学仏教学部教授角田泰隆師より、「摩訶般若波羅蜜」の巻を御提唱いただきます。是非、ご参加、ご修行ください。

龍声

東龍寺報
平成元年三月廿五日創刊
発行編集所 〒959-1502
新潟県南蒲原郡田上町
曹洞宗　東龍寺
電話 (0256) 57－3395
FAX (0256) 57－2174
ホームページ
http://www.ginzado.ne.jp/~ryusei/
E-mail
ryusei@ginzado.ne.jp

ハンカチ王子から思いを馳せて

東龍寺住職　渡辺宣昭

昨年は、夏の甲子園高校野球で盛り上がりました。特に優勝した早稲田実業の斉藤投手は「ハンカチ王子」と呼ばれ、一世風靡しましたが、私は、中学二年生の時、昭和四十四年青森県三沢高校と愛媛県松山商業の対決を懐かしく思い出しました。延長十八回ゼロゼロのまま、引き分け再試合。最後は、松山商業に栄冠は輝きましたが、昨年の決勝戦以上に脳裏に焼き付いております。

しかし、栄光の高校時代を過ごしたからといってその後の人生が順風満帆な歩みを出来るわけではありません。

ノンフィクション作家田沢拓也さんの「『延長十八回』終わらず」を読むと、逆境の中で甲子園体験を支えに生きる元選手に胸を打たれます。

特にその中で心に響いたのは、数年前にお亡くなりになった三沢高校の高田邦彦元選手の言葉です。彼は小さな会社で働きながら、少年野球を指導しました。自主性を尊重した高田さんは、打席に向かう子どもに「耳をすませ。髪の毛から足の先まで全部お前の味方だ。やればできる」とささやき続けました。これは、自分自身にも言い聞かせ続けた言葉でもありました。

私は、昨年の秋、特派布教で、北海道へ行った折、布教師の先輩の札幌市薬王寺御住職・田中清元老師の友人で、札幌在住の絵本作家・岡本佳子さんとそのご両親にお会いしてきました。そして、佳子さんは、高田さんの言葉を実践しておられる方だなあと実感してきました。

佳子さんは、生後まもなくダウン症であることがわかりました。母親の久子さんは、将来に絶望し、死に場所を求め乳飲み子の佳子さんを抱いて札幌の郊外・円山八十八ヵ所に向かいました。その岡本さん親子を救ったのが、六十一番目の地蔵「母子地蔵」でした。その日から久子さんは、障害のあるわが子とともに強い心で生きていこうと決心し、育ててこられました。

私は最初に母親の久子さんから案内されて、六十一番目の母子地蔵を拝んできました。円山の登山口に一番のお地蔵様があり、そこから登山道に沿って、間隔を置きながら順番にお地蔵様が並んでいました。それぞれが施主の方々の願いのこもったお地蔵様でした。幸い好天に恵まれて、幼稚園児たちが賑やかに登り、時折り、リスが出てきて愛嬌を振りまいてくれたりする中、三十数年間の子育てのお話などをお聞きしながら、約四十分程登って、母子地蔵に着きました。母地蔵がおかっぱ頭の女の子を抱き、男の子がかかとを伸ばして母にすがり付いていました。来てお参りできてよかったなと心から思えるとても微笑ましいお地蔵様でした。久子さんは女の子の顔が佳子ちゃんにソックリ、男の子のかかとが佳子ちゃんのかかととダブって見えて「一つしかない命を大切にしなさい」とお地蔵様から希望を与えられて佳子さんを一生懸命に育ててきたそうです。

六十一番母子地蔵で、母・久子さんと

それから、岡本家へと向いました。前夜、日本シリーズ最終戦が行われた札幌ドームの近くの自宅に着くと佳子さんとお父様が迎えてくれました。第一印象、何てやさしい穏やかな家族なんだろう、佳子さんがそっと寄り添ってくれて一緒に写真を撮りました。自宅の一室を解放して「岡本佳子の美術館」があり、温もりあふれる作品がぎっしりと並んでいました。特に目を引くのは、「ニコニコ笑顔のお地蔵さん」でした。きっと、自分とお母さんの命を助けてくださったお地蔵様を感謝の気持ちを込めて書いているんでしょうね。最初は、自分を一生懸命に育ててくれたご両親やお姉さんのために書いていたのが、認められるようになって、多くの人たちのために描くようになっていかれたのでしょう。

私はその晩、東龍寺へ戻り、早速お礼の電話をしながら、「実は五日後に二百名の方々にお説教をするのですが、佳子さんの作品の栞（しおり）を二百枚送っていただけないでしょうか」とお願いをしたら、ご快諾くださり、四日後に何と三百五十枚それも裏に全部直筆で「美しい心　やさしい心　つよい心　よしこ」と丁寧に書いて、送ってくださったのです。郵送するまで、一日半という限られた時間の中で、一枚一枚に「大事に使ってね、」とつぶやきながら、まごころをこめて書いてくださったのです。私がお礼にと、新潟特産の普通の梨より大きな新高梨を送ったら、「赤ちゃんの頭位の大きな梨に白い服を着て、佳子の目には笑って見えました。感謝してたくさんの皆さんにも「ごちそう」しています。」とまるで白い紙に包まれた梨が生きているような丁寧な礼状を下さいました。

ある老師が「森羅万象に大事に向かい合っているか」と私ども僧侶に戒めのお言葉をくださいましたが、佳子さんの生き方を拝見して、生かされている自分をしっかりと認識して、周りのすべての人やものに対して真心込めて接しながら、いただいた命を精一杯活かして生きている様子が伝わってきて私もこうありたいと深く願ったしだいです。

私たちは、逆境に立たされると、そこから逃れようと悩み苦しみます。そんな時も私たちの体で、心臓は動き、呼吸は続いています。そして、髪の毛から足の先までにある六十兆個の細胞の一つ一つが自分自身を活かしながら、お互いに協力し合って、私たちのために働いています。正に、生かされている私たちの命なのです。自信が無くなったり、くよくよ考えたりしたときは、耳を澄まして、体の鼓動を聞いてみましょう。しっかり頑張ってと応援してくれているに違いありません。そして、日々の生活の中で小さなことに感動する心を持ち、多くの人や物に、やさしさをもって接していきたいものです。

合掌

岡本佳子の小さな美術館で、

檀信徒研修に参加して

檀徒総代　曽根　畠山俊雄

毎年恒例の曹洞宗新潟県第四宗務所主催の檀信徒総括研修会が十一月一日から二日の一泊二日の日程で、秋も一段と深まり紅葉も美しさを増す新発田市月岡温泉「清風苑」を会場に開催されました。私もこの檀信徒研修会には三回程参加の機会を得ていますが、今年の研修会には今までよりも関心を深く持ち、参加させていただきました。その理由は、講師先生が「特派布教師」東龍寺住職・渡辺宣昭師であるからであります。尚、今回は講師先生がもう一人いました。福井県越前市「はぐるまの家」代表・坂岡嘉代子先生です。

講演中の東龍寺住職

最初の講演は、我等が菩提寺東龍寺住職・渡辺宣昭師でした。「教えを受け継ぎ伝え、今ここを生きていく」と題して講話が始まりました。最初は、東龍寺でも評議員会の時には、坐禅から始まるように、聞き方も話す方も心を落ち着かせ、集中出来るようにと坐禅の話と実践からでした。数分間の坐禅が終わると本題の講話へと進んでいきました。参考資料も実に良く整理され、順序良く書かれておりました。話が進むにつれ、弟子「道昭」さんを育てる苦労話とか、「道昭」さんとの別れを決心する心の葛藤、そして別れた後の心配。そして話題は次々と進み永平寺での修行の話になりました。毎日一人ずつ交代で行う早朝からの勤めを「寝坊こいて」すっぽかした話とか、又永平寺貫首・宮崎禅師様から数々の教えを受けた話とか、又自分の父でもある東龍寺先代の師匠の話をされました。色々の話をされていく中で、時間を見ながら特派布教でも訪れた地方の話を交え、本当に昼食後からの時間帯にも関わらず参加者全員が熱心に聞き入りました。

少しの休みを取ってから、坂岡先生の講話が始まりました。自分自身の生い立ちから今までの話をされました。「はぐるまの家」とは、親から見放されたり、何らかの原因で行き場を失ったりした子供達を立派な社会人となるべく養育する家で、その家が現在のようになるまでの苦労の連続の話、そして今は子供達が「太鼓」を打つ事を通して実に生き生きとしてきた様子を話されました。そして最後に、その子供達の生の演奏を聞くことが出来ました。実に立派で迫力の有るものでした。私は最後の列に居たんですが、その時はステージが反対になったので、一番前の席で聞くことが出来ました。足元から力強い響きが私の体に伝わって来るのがわかりました。十六歳から二十二歳までの若者達の力強い太鼓でした。

最後に檀家の皆様方もどうか宗務所が計画する各種研修会に多数参加されることを願っております。

自分の心の糧となる事を見つけるために。

「はぐるまの家」の子供たちの太鼓演奏

◆住職より、一言◆

畠山さんには、平成十五年十二月に檀徒総代に就任していただいて以来、各種研修会に御参加いただいております。

卓越した見識をお持ちの方で、寺の役員会でも、数々の建設的な意見や仕組みを提案していただいております。

今後とも、東龍寺護持の為、御協力よろしくお願い申し上げます。

秋の講演会を聞いて

中店　野上正三

十月十三日(金)東龍寺様照光殿で桂小金治師匠の講演を聞く機会を得ました。落語家出身の小金治師匠の豊富な経験に基づく巧みな話術、特技の草笛やハーモニカで時のたつのを忘れて大いに笑い、みんなで歌い、うなずき合いながら聞き入りました。

八十歳を過ぎた師匠の心・体・話術は年を感じさせないものでした。

師匠の幼少時代の家庭の様子は、私どもの家庭と同じように、とても厳しい父親と優しい母親の家であった。父親のげんこつの痛さ、そのあとの母親の慰めは七十年たった今でも忘れられない。その中から私はことの善悪を知った。

叱って、教えて悟らせることと、慰めたり、誉めることが大切である。それによって、子どもは善悪を知り、人として、してはならないことを知るのです。

また、師匠の家は商売をやっていたので、その手伝いを良くやらされたそうです。手伝いをしながらいろいろのことを覚え、家族の絆も深まったように思うとのことでした。

父親は、大変な倹約家で、ケチだった。「鉛筆の芯は削ってはならない、回しながら使えばとんがる」と言った。おもちゃは一つも買ってくれなかった。「欲しかったら自分で作れ」と言った。徹底した倹約の中からいろいろな工夫が生まれた。

ハーモニカが欲しいとせがんだことがあった。いくらせがんだり、お願いしても買ってはくれなかった。そして、草笛でいろいろの歌を聞かせ、「おまえもこれで我慢すれ」といわれた。けれどもいくら頑張っても音がでない。

父は「何事も実行しなければ成就できない。実行するに当たっては、苦労し、努力し、辛抱することが大切である。人は辛抱しなければ心棒ができない。心棒のない人間にはなるなよ。」とよく言っていた。

また、他人のできることが羨ましかったら、ひとの何倍も練習したり、努力してできるようになればよい。

私の草笛は、父の真似をして何年もかかってやっとでき、今でもできる特技となりました。

知識はできるだけ広く、深く得なければならない。その為には一生懸命勉強しなければならない。

でも、知識がいくらあっても自分にも社会にも役立つとは限らない。本当に役立つ実学でなければいけない。世の中では実学がその人の存在をあらわすのである。

一人の人間が存在するには、親の大切さ、家族の大切さ、社会の大切さを常に考えていかなければいけない。

良いことがあったら、皆さんのお陰だと思い、悪いことがあったら、自分のせいと思える人間になりたいものである。

とてもよいお話であったが、残念なことに、今、子育て真っ盛りの方の参会が少なかった。

◆住職より、一言◆

野上さんは、とても、温厚な人柄で、教養もあり、尊敬申し上げている方です。

桂師匠の講演を若い方々に聞いていただきたかったと、結んでくださいましたが、正に同感！。今年は、幅広い年代の方々に集まってもらえるよう心掛けます。

講演中の桂小金治師匠

まごころに生きる

上野　中野ヨキエ

六月一日、北海道、札幌の「月寒グリーンドーム」にて、梅花流全国奉詠大会が、開催されました。

"さすが北海道"とあって、晴れてはいましたが、風も強く肌寒い日でした。

曹洞宗管長・大本山總持寺貫主・大道晃仙禅師様のご挨拶があり、続いて、曹洞宗宗務総長・有田恵宗老師様のご挨拶の中で「今日は、社会に目を移すとき、自己中心的で人命を軽視し、自分さえ良ければという事件が続発しています。さらに、大自然の猛威が、各地を襲い、多くの方々が、水害・雪害等に遭われ、これは地球環境の悪化が一因ではとも言われています。ここに、被災された方々に対し、心よりお見舞い申し上げ、早期の復興を御祈念いたします。」とのお言葉がありました。続いて、大分市曹洞宗勝光寺出身で神田川などの大ヒット曲を生み出されたシンガーソングライター「南こうせつ」さん作詞作曲の梅花流詠讃歌の新曲"まごころに生きる"が発表されました。

札幌、月寒ドームにて、筆者左より2番目

一、そよ吹く風に小鳥啼き　川の流れもささやくよ
　季節の花はうつりゆき　愛しい人は今いずこ
　ほほえみひとつ涙ひとつ　出逢いも別れも抱きしめて
　生きてる今を愛して行こう

二、広がる海ははてしなく　全ての命はぐくむよ
　人の心もおおらかに　互いを敬い信じ合おう
　ほほえみひとつ涙ひとつ　出逢いも別れも抱きしめて
　生きてる今を愛して行こう

三、幼い頃にいだかれた　温もり今も忘れない
　この世でうけた幸せを　そっとあなたにささげましょう
　ほほえみひとつ涙ひとつ　出逢いも別れも抱きしめて
　生きてる今を愛して行こう

と全員でお唱えしました。

詠讃歌は、お唱えする人の年齢も性別も声の良し悪しも、関係ありません。お唱えしていると、自然に心がやすらぎ、生かされていることの尊さに気づかされ・・・、これからも梅花講の仲間とともに学び、詠讃歌を心の糧として、自己を磨きながら精進していきたいと思います。

合掌

梅花講お唱えの様子

◆住職より、一言◆

中野さんは、東龍寺梅花講講員として、寺の行持に、進んで参加され、仏道を実践しておられます。

また本尊様へ、行持ごとに生花を上げてくださる篤信家でもいらっしゃいます。

今後とも、東龍寺の隆昌、並びに、御先祖への報恩供養の為、御信心のほど、よろしくお願い申し上げます。

五条衣に導かれ

新潟市　加藤陽子

大哉解脱服　無相福田衣　被奉如来教　広度諸衆生

夜明け前のほの暗い僧堂で、暁天坐禅の静寂を破り、修行僧が頭上にお袈裟を頂いて唱える搭袈裟之偈。御仏の教えそのものを身に纏い、教えを実行させていただきます、というその姿の尊さは、早朝の清冽な空気とともに、傍で坐らせていただく私の心まで清めてくださるような気がいたします。

三年前、大本山永平寺の参禅研修で御仏の教えに出会い、修行僧のひたむきさ、穏やかさに心打たれ、私も坐禅をしたらこんな風になれるのかしら、と坐禅に親しむようになった私にとって、仏弟子の証という絡子（五条衣）は憧れの的でした。ご縁をいただいて東龍寺様で坐禅をさせていただくようになり、まさに仏様のようにお優しい参禅の皆様方が、自ら把針された絡子を授かっておられるのを拝見し、なんて素晴らしいのだろう、いつか私も把針ができたらと願っておりました。どのようにしたら把針できるかも分からず、ともかく焦らず機が熟したら、と思っていたのですが、思いが募り、結局東龍寺様に無理をお願いして把針の手ほどきをしていただきました。上手下手ではなく、一針一針真心を込めて針を運ぶことを大切に・・・。把針をしていると、坐禅をしている時のように静かで落ち着いた気持ちになっていくのを感じました。

十一月十一日大安の日、ようやく出来上がった絡子の授与に先立ち在家得度させていただけることになったとき、初めて永平寺にお参りしたときのように安らかで有難い気持ちになり、あぁ、やっぱり絡子は功徳衣なのだ、と実感しました。当日は方丈様をはじめ、東岸寺様、吉祥寺若様（平成十八年十二月より光明寺住職）にもお力添えをいただいて如法の式をしていただき、もったいない安名をいただいて感激でいっぱいでした。また、いつも坐禅会でお世話になっております皆様方からも、「良かったね、おめでとう。」とお声がけいただき、晴れ晴れと嬉しい気持ちが広がりました。

坐禅会にお邪魔するようになってまだ一年ですが、皆様方がいつも温かい笑顔で迎えてくださる東龍寺の坐禅会が大好きです。「菩提の妙果は秋の実に類たり」絡子にしたためられた方丈様のお言葉を励みに、皆様方にいただいたやさしさ温かさを私もいつか真っ直ぐに心に映すことができるよう、絡子すなわち御仏とともに毎日を、大切に過ごしていきたいと思います。この度は本当にありがとうございました。

九拝

◆住職より、一言◆

加藤さんは、月例坐禅会に、一昨年の暮れから、新潟市内中心部から、一時間近くかけて、ほとんど休まず参加されています。

道心堅固で大本山永平寺へも参禅され、住職の出身高校のはるか後輩でもあり、東龍寺坐禅会参加者とも親しくなり、一同新たな息吹を頂いております。

一層の御精進を御期待しております。

眼蔵会飯台、筆者・左より2番目

龍聲に寄せて
～東龍寺での思い出と今の私～

私は中学生の時、お寺でご住職主催の塾に通っていました。それから十年ほどが経ち、現在は東京でサラリーマンとして時間と仕事に追われる毎日を過ごしています。

先日、祖父の法事の際に久しぶりにご住職とお会いして、龍聲への寄稿を依頼されました。当初、両親から、「東龍寺の塾での勉強が、今活きていることなどを書いたら。」と言われて、当惑しました。中学生の時分はあまり勉強していなかったので、もしそんなことを書けば、嘘臭い文章になってしまうだろうと。そこで、ありのまま今思い出すことを書きます。

一日の仕事を終えて、帰り道ふと空を見上げると、雲に閉ざされた東京の空でもわずかながら星が見えました。かすかな星の光を見ていると、中学生の頃の東龍寺での勉強（？）を終えての帰り道ではもっとたくさん星が見えたなあと、懐かしい思いが目の前をよぎりました。すると、「奥様お手製のマドレーヌのおいしさ」や「ふざけてカメムシの死骸をストーブで焼いた際の臭さ」「授業中に友人とガムを噛んでいて住職に怒られたこと」など、断片的ではありますが、勉強以外での東龍寺の楽しい思い出が甦ってきました。

祖父の法事の折 10月14日、筆者・右より2番目

食べ物のことや悪ふざけなど、今思えば恥ずかしくも楽しい思い出ばかりです。なかなか時間的に余裕もありませんが、当時の仲間と会い、昔話をしてみたい思いです。

実現したい夢があり、私は今の仕事に就いています。ですが、目の前の仕事に追われる毎日で、実現したいことを忘れかけるときがあります。寄稿にあたり、昔を振り返ったことで一つの気付きがあたえられたように思います。十年経っても消えない東龍寺での思い出は、今の私にとってちょっとした心の支え（？）になっているのではないかと。東龍寺での思い出を始めとする郷里での思い出を糧として、夢の実現に邁進していく所存です。

最後になりましたが、東龍寺のご隆盛とご住職のご健勝を祈念申し上げます。

二〇〇七年二月　東京にて
渡邊　亮

◆住職より、一言◆

亮君は、平成七年度中学入学でした。学び方に余力があり、幅広い知識を持っていたことが、とても印象に残っています。

田上で育ったことを誇りに、どうか夢の実現に向けて一歩一歩確実な歩みをして、人間的にも大きく成長してくれることを心より願っております。

曹洞宗　心の電話　〇三―三四五四―五四一〇

こちらに電話をすると、全国の曹洞宗の方丈様達が一週間交代で、三分間の「ほとけの心」をわかりやすくと説いた法話が流れます。二十四時間いつでも繋がりますので、是非、お聞きください。

東龍寺住職も昨年より、年二回担当しております。

本年は、六月十二日～十八日、十一月二十七日～十二月三日です。お待ちしております。

【東龍寺年中行持】

七月　金毘羅大祭
八月一日　うらぼん会（盆参）
八月廿四日水子地蔵尊並びに・観音様大祭
九月廿三日秋のお彼岸会（お彼岸の中日）
十月十日　常斎米法要
十二月三十一日　除夜祭（除夜の鐘）大般若祈祷会
一月一日　寺年始（近隣の檀家）
一月二日　寺年始（遠方の檀家）
三月廿一日春のお彼岸会（お彼岸の中日）

【平成十八年度事業、行持報告】

一、四月三日(月)午前十時より、廿一世二七回忌・廿二世二三回忌を中心に先住忌、並びに檀信徒供養法要を行った。

平成十七年十二月に認可を受けた曹洞宗参禅道場認可書を宗務所長である本寺吉祥寺様より授与していただいた。

一、五月十八日(木)～二十日(土)に、駒沢大学教授角田泰隆師を講師にお招きし、第六回眼蔵会を講本「現成公案」で、開催した。

眼蔵会参加者・五泉市村松の阿部洋夫氏が、書籍「村松萬葉」を献本してくださった。ご自身も「第五回眼蔵会に参加して」という題でご寄稿されている。

一、七月九日(日)、円山で、湯田上温泉あじさい園落慶式。

一、七月十日(月)、金毘羅大祭を修行。

一、九月三日(日)～五日(火)に第一回（二回の内）奥州三十三ヶ所観音霊場巡拝の旅を行った。

一、十月十三日(金)午後一時半より、田上町仏教会では、桂小金治師匠をお招きし、第十一回秋の講演会を行った。

一、月例加茂法話会は、穀町商店街振興組合二階を貸り、幹事平山ヨイ氏らの協力により、開催している。

【参禅の報告】

一、四月十四日「第二六回卯辰会の集い」（代表三条市・内山荘一）十八名参禅。

一、五月二日、田上小三年生、参禅と東龍寺の歴史説明。

一、五月十六日、越友会三条支部（北越銀行OB会）十五名参禅。

一、七月十日、豊新会一三名（代表・小野澤利衛）参禅。

一、九月二二日、県警本部交通機動隊・白バイ隊、七名　参禅。

一、九月二四日、(株)和光ベンディング（自動販売機総合オペレーター）二六名社員研修会、坐禅・飯台。

一、十一月十六日、白根老人クラブ連合会・女性部代議員研修会二十名参禅と法話。

一、十二月九日～十日、成道会坐禅会を一泊二日で修行。

一、一月二一日、パワーズラグビーフットボールクラブ一行、九名坐禅。

【平成十九年度事業、行持案内】

一、五月十七日(木)～十九日（土）に、駒沢大学教授角田泰隆師を講師にお招きし、第七回眼蔵会を講本「摩訶般若波羅蜜」で、開催する。

一、九月二日(日)～四日(火)に第二回（二回の内）奥州三十三ヶ所観音霊場巡拝の旅を行う。

一、十月十二日(金)午後七時より、田上町仏教会では、東龍寺を会場に、前大本山總持寺貫首御誕生寺住職　板橋興宗老師をお招きし、第十二回秋の講演会を予定している。

【月例坐禅会の御案内】

一、月例坐禅会を毎月第二土曜日夜七時半より行っています。

どうぞ、お気軽にご参加ください。

【心の癒し坐禅体験】

一、毎週水曜、木曜（祭日は除く）の午後四時から、約一時間、湯田上温泉宿泊者の皆さんに坐禅修行体験をしていただいております。

【梅花講のお知らせ】

一、梅花講では、毎月七日と、二十二日の二回練習をおこなっています。

お始めになりたい方は、お気軽にご参加ください。

【その他の照光殿での催し】

一、大正琴のお稽古を先生をお招きし、有志で行っております。興味のある方、のぞいてみませんか。

【お寺よりのお願い】

一、今年は、お盆の棚経回りを下記の日程で行いますので、ご理解とご協力の程、お願いします。

【お盆前住職】新潟・亀田・三条・巻・燕・白根・長岡
【十三日住職】新津・中山・赤渋・笠巻・三ツ屋・三枚潟・市ノ瀬
【東岸寺若様】覚路津
【お盆中住職】湯川・谷・中店・山崎・山田・湯古屋・加茂地区
【光明寺様】川之下・原ヶ崎・下吉田・鎌倉・新保・龍玄・嶋・圧瀬・石田新田・後藤・曽根・横場・羽生田・川船河
【少林寺様】上野
【少林寺若様】本田上

編集後記

寺報十九号を発刊するに当たり、畠山俊雄氏、野上正三氏、中野ヨキエ氏、加藤陽子氏、渡辺亮君より、ご寄稿を賜り有難うございました。

今後とも皆様よりのご寄稿をお待ち申し上げております。

住職は、三月一日～六日まで、中国の「湖南と湖北省へ禅の祖跡を訪ねて」の旅に行って参りました。インドから中国に伝わった禅の教えが、広大な土地で育まれて行った様子を肌で感じてきました。皆様にお話する機会があればと願っております。

合　掌